

立教大学国際学術研究交流制度

国際会議助成

2022年度研究成果報告書 (A, **B, C)**

1. 会議概要

| | | | | |
|------------------|---|--|----------------------|----------|
| 会 議 名 | 和文 | 第20回子どもの哲学国際学会 | | |
| | 欧文 | The International Council of Philosophical Inquiry with Children | | |
| 主 催 | International Council of Philosophical Inquiry with Children Organizing Committee | | | |
| 共 催 | 立教大学文学部、立教大学文学部教育学科 | | | |
| 後 援 | 日本哲学会 | | | |
| 開催責任者 | 所属 | 文学部 | | |
| | 氏名 | 河野哲也 | | |
| 運営事務局 | 事務担当代表者 氏名 | 河野哲也 | | |
| | 事務担当者 氏名 | 永井玲衣 | | |
| | 事務担当者 氏名 | 神戸和佳子 | | |
| 開催期間 | 2022年 8 月 5 日 から 2022年 8 月 11 日まで | | | |
| 開催場所 | 立教大学池袋キャンパス (オンサイト、ハイブリッド) | | | |
| 参加者数 ※1 | 学内 | 6 名 | | |
| | 学外 国内から招聘 | 1 4 名 | 海外から招聘 | 8 名 7 カ国 |
| | 合計 | 2 8 8 カ国 | | |
| 公開講演会等 参加者数※2 | ① 2022年 8 月 5 日 ～8月11日 496名 37カ国 | | | |
| 開催日程 | | 午前 | 午後 | 夜 |
| | 第1日 (8/5) | プレカンファレンス ワークショップ | プレカンファレンス ワークショップ | |
| | 第2日 (8/6) | プレカンファレンス ワークショップ | プレカンファレンス ワークショップ | |
| | 第3日 (8/7) | | 事前準備 | |
| | 第4日 (8/8) | 開会式 公募発表 | 公募発表 基調講演 | |

| | | | | |
|--------|---------------|----------------|-------------|-----------------|
| | 第 5 日 (8/9) | 基調講演 公募発表 | 公募発表 | |
| | 第 6 日 (8/10) | 基調講演 表彰式、総会 | 公募発表 | |
| | 第 7 日 (8/11) | ポストカンファレンス | ポストカンファレンス | |
| ※ 3 | 開催経費総額 (C) | 予算額 | 6,790,688 円 | 執行額 7,482,857 円 |
| | 助成申請外資金総額 (B) | 予算額 | 3,795,000 円 | 執行額 3,308,318 円 |
| | 国際会議助成額 (A) | 予算額 | 2,995,688 円 | 執行額 2,909,909 円 |

※1 参加者とは、会議において講演、パネラー、コメンテーター等の活動を伴う者をいう。

※2 一般公開された講演会等に聴講の為に参加した者、講演者、パネラー等は除く。参加者名簿を添付すること。

※3 (A)(B)(C)の金額は、様式5の金額と合わせること。

※ホームページ等で公表します。(様式2)

国際学術研究交流制度－国際会議－報告

2. 会議開催趣旨概要

「子どもの哲学」(P4C:Philosophy for children;P4wC: Philosophy for /with Children; PwC: Philosophy with Children) は、哲学的な対話を通じた学びの方法であり、これまで 40 年以上にわたって 60 以上の国や地域で実践されている。こうした実践にかかわる理論的な問題への学際的・超領域的な取り組みを促進するために、1985 年にこどもの哲学国際学会(ICPIC:The International Council of Philosophical Inquiry with Children)が発足し、子どもの哲学の範囲を国際的に拡大している。ICPIC は、現在では 60 カ国以上の参加者を含む、この分野最大の学会である。

子どもの哲学は、子ども同士で、あるいは大人と子どもを交えて、主に対話という方法を持ちながら、哲学的なテーマについて共同で探究する実践的な活動を指す。国内では「哲学対話」という言葉を充てられることも多く、答えを単純に得るよりも、参加者相互の理解を深めながら自分の思考も進展させる過程を重視する対話型の教育活動である。こうした活動の意義は、思考力を育む教育実践としてだけでなく、国内でいえば 2011 年の大津波や原発事故など、子どもたちに影響を与える可能性のある問題について、子どもたち自身が考えたり話したりすることを促す社会的実践として認識されつつある。以上のような傾向性から、教育学の枠内で考察されるものではなく「教育的、社会的、文化的、政治的要素を含んだ複雑性のある実践」として捉え直す必要がある。そうした中で、教育学の枠内にとどまり、自らの理論基盤や方法論の内部に自足することから離れ、社会学、政治哲学、発達心理学など、できるかぎり多様な観点から問い直し、変容する実践の理論基盤を構築せねばならない。

本会は、結成以来、二年に一度のペースで大会を開催しており、1985 年にデンマークにて第一回大会を開いてから、世界各地で開催されてきた。しかし 1989 年の第三回大会が台湾で、2011 年の第十五回大会が韓国で行われたものの、開催地は欧州、アメリカ大陸に偏り、アジア圏での開催はほとんどなされていなかった。そのため日本開催にはかねてより、アジア諸国はもちろん、多くの会員の希望が集まっており、より豊かなネットワークを構築する意義としても必要とされていた。開催責任者はこの十数年 ICPIC に参加し、本部オーガナイザーを務めると共に、日本開催の打診を受け、2019 年にコロンビアで行われた第 19 回 ICPIC 大会総会において、次回第 20 回 2021 年大会を立教大学池袋キャンパスにて行うよう立候補し、承認された。だが 2020 年に新型コロナウイルス感染拡大のため、東京オリンピック・パラリンピック大会が延期されることに伴い、第 20 回大会は 2022 年に対面とオンラインを併用するハイブリッド型の形式をとった上で延期されることとなった。具体的には、原則対面であり、参加者の一部がオンラインで参加できる形式を取った。

3. 会議の成果概要・今後の展望等

2022年大会のテーマは「教室内と教室外の哲学」であった。子どもの哲学は、病院や児童養護施設、博物館など教室以外のコンテキストでの実践も行われている。国内では、90年代後半に子どもの哲学が導入されて以来、公立・私立を含めて50校以上で実施されており、最近ではお茶の水女子大学附属小学校が政府の資金援助を受けて子どもの哲学のカリキュラムを導入した。また世界の傾向と同様に、子どもの哲学はカフェや図書館、美術館など、日本社会のさまざまな場所で行われている。以上のような背景をふまえ「教室内と教室外の哲学」というテーマで大会を行った。とはいえ、日本における子どもの哲学の実践は、他の子どもの哲学先進国（主に英語圏）に比べ、20年程度の歴史しかなく、まだまだ発展途上の段階にある。そのため、立教大学でICPICを開催することは、相互的な意義を持つことになった。国外の研究者・実践者に世界の潮流に沿った教室内外での子どもの哲学のユニークな体験を提供できたことと同時に、国外の実践、経験、理論から学ぶことが可能となった。

本大会前のプレワークショップでは、参加者数を絞り、実践に焦点を当てた企画が5つ提案された。本大会では、初日のオープニングでは、本学の西原廉太総長からビデオメッセージをいただき、ICPIC会長から開会の挨拶があった。それぞれの日に、大会企画の基調講演（平田オリザ氏、中岡成文大阪大学前教授）とシンポジウム（木村葉子氏、佐藤正和氏、西野真由美氏）が登壇し、多くの聴衆を得た。本大会の3日間では、プログラムのようには早朝から夕方まで8つの会場（教室）で同時並行して、関連するさまざまなテーマにおいて研究発表、シンポジウム、ワークショップが実施され、全体で200を超える発表者が登壇し、盛況であった。海外からは、コロナ禍により事前のPCR検査や短期ビジネスビザが要請される困難な状況ながら、数十名の対面参加者があった。対面での実施は、コロナ感染状況を踏まえた本学の基準に準じて安全に行われた。

以上の充実した内容により、参加者は、多くの人と学術的な情報と知識を交換することができた。ワークショップなどでは教育実践を体験し、シンポジウムでは多様な人々と知的に交流する機会を得られた。本大会の特徴として、従来のも大会にも増して、大学などの研究者だけでなく実践者や教師、学生が数多く参加するオープンな場となり、若手研究者も分け隔てなく扱われ、国際的に活躍する著名な研究者とも個人的に容易に親しくなることができた。そのため、研究者と実践家、教育者が国際的に相互に活発に交流でき、とくに国内の学校の教師や実践者にとっては、海外でのさまざまな実践の取り組みや理論的な背景を知り、日本での実践を相対化し、大きく視野を広げる機会となったであろう。本大会やプレワークショップにおいては、本学院の者も含め、高校生や大学生の参加者もあり、若い人たちにとって国際学会を経験する貴重な機会となった。本学の教職員や大学院生にとっても、貴重な国際大会を身近に感じることはできずであり、またとない知識と経験を習得する機会となったと思われる。

今回はハイブリット式の開催となり、そのためにこれまでアクセスが困難であった各国の研究者や実践者の参加、たとえば、南米やアジア諸国からの参加も多くなった。さらに、参加費を従来よりも安価（無料参加もあり）に設定したこともあり、延べ400名を超える参加者があり、これまでのICPICでは最大規模の大会となった。ハイブリッドでの国際学会開催は、時差を伴い、機器などに技術上・通信上の問題が生じやすい困難さがあるが、大会の運営委員と本学の職員、アルバイト学生の大きな努力により、大過なく運営ができた。唯一残念なのは、企画当初では予定されていた懇親会などの対面での交流企画が、コロナ禍によりすべてキャンセルせざるを得なかったことである。インフォーマルな場での交流は、実は国際大会での重要な関係形成の機会であるが、これが限定されたことは、致し方ないこととはいえ、悔やまれる。閉会式とポストカンファレンスでは、本学会長・副会長、理事会から日本の大会開催委員会と本学の教職員の尽力に、深い感謝の意が表せられ、参加者からも多くの満足と感謝の言葉をいただいた。

4. 会議の構成

(1) 学内参加者

| 氏名 | 所属・職名 | 会議における活動 | 内 訳 (学部・研究科) |
|--------------------|------------------------------|---------------|---|
| 河野哲也 | 文学部・教授 | 開催委員長・プログラム委員 | 文学 4名 コミュニティ福祉学 1名 21世紀社会デザイン (1名) その他(兼任講師) 1名 <hr/> 計 6名 |
| 中村百合子 | 文学部・教授 | 開催委員 | |
| 大熊玄 | 文学部・准教授 21世紀社会デザイン研究科・准教授 | 開催委員 | |
| 渡辺哲男 | 文学部・准教授 | 開催委員 | |
| 奇二正彦 | コミュニティ福祉学部・特任教授 | 開催委員 | |
| 永井玲衣 | 兼任講師 | 開催委員 | |
| 変更内容 (氏名、不参加/追加の別) | | | |

(2) 学外参加者 (国内、国外)

| 氏名 | 国名・所属・職名 | 会議における活動 | 内訳 |
|---|---|---|---|
| 神戸和佳子 川辺洋平 土屋陽介 得居千照 豊田光世 西山溪 | 日本・北陸大学・講師 日本・淑徳大学短期大学・講師 日本・開智国際大学・准教授 日本・筑波大学大学院所属 日本・新潟大学・准教授 日本・同志社大学・助教 | 開催委員 開催委員 開催委員 開催委員 開催委員 開催委員・プログラム委員 | 国名 人数 日本 14名 アメリカ 2名 イスラエル |
| 長谷川解 堀越耀介 望月太郎 渡邊文 佐藤正和 下桐実雅子 中岡成文 平田オリザ | 日本・探究学習塾 日本・学術振興会特別研究員 日本・大阪大学大学院・教授 アメリカ・ハワイ大学大学院 日本・NHK・プロデューサー 日本・毎日新聞社 日本・大阪大学元教授 日本・劇作家、芸術文化観光専門職大学学長 | 開催委員 開催委員 開催委員 開催委員 基調講演者 基調講演者 基調講演者 基調講演者 基調講演者 | 1名 カナダ 1名 南アフリカ共和国 1名 オランダ 1名 メキシコ 1名 |
| 西野真由美 | 日本・国立教育政策研究所・主任研究員 | 基調講演者 | 1名 |
| Walter Kohan | ブラジル・リオデジャネイロ州立大学・教授 | プログラム委員 | ブラジル 1名 |
| Arie Kizel | イスラエル・ハイファ大学・教授 | プログラム委員 | プログラム委員 |
| Susan Gardner | カナダ・キャピラノ大学・教授 | プログラム委員 | プログラム委員 |
| Maughn Gregory | アメリカ・モントクレア州立大学・教授 | プログラム委員 | プログラム委員 |
| Rose-Anne Reynolds | 南アフリカ共和国・ケープタウン大学・講師 | | |
| Pablo Lamberti | オランダ・小中学校講師 | | |
| Santiago Outón de la Garza | メキシコ・Big Thinkers・ディレクター | | |
| 変更内容 (氏名、不参加/追加の別) | | | 計 8カ国 22 |